JAFAE Newsletter No.45 (March 2017)

第 39 回全国大会東洋英和女学院大学横浜キャンパスにて開催

日本「アジア英語」学会　吉川寛会長　会長挨拶

第 39 回全国大会プログラム

日　時：2016 年 12 月 3 日（土）10:00～17:30
場　所：東洋英和女学院大学
横浜キャンパス　8101 教室（8 号館 1 階）

プログラム
総合司会：池沙弥（椙山女学園大学）
10:00－10:10
大会実行委員長挨拶
齋藤智恵（国際医療福祉大学）
会長挨拶
吉川寛（中京大学）
10:10－11:30　基調講演
An Acceptable Speech Variety? A Historical View of Australian English
Patricia Sippel（東洋英和女学院大学）
11:30 –11:50　会員総会
11:50 –13:00　昼食
13:00 –15:00　研究発表
司会：トレント信子（東洋英和女学院大学）
1. Beyond Mutual Intelligibility in ELF Interactions
George O'NEAL (Niigata University)
2. Factors Influencing Intelligibility of Non-native Speech for Non-native Ears: A Preliminary Literature Review
川島智幸（群馬大学）
3. The Use of Articles and Plurals by Indonesian Speakers of English in ELF interactions
Jean MULDER (University of Melbourne)
4. Fundamental Issues of Assessing EIL/ELF in a Classroom Context
中村　優治（慶應義塾大学）
15:15 –17:15　シンポジウム
「国際コミュニケーションマネジメントの理論と実践」
司会：齋藤智恵（国際医療福祉大学）
発題：
「国際コミュニケーションをマネージするということ」
竹下裕子（東洋英和女学院大学）
「国際コミュニケーションマネジメントに対する大学生の意識分析」
三宅ひろ子（昭和女子大学）
「大学の授業内での言語マネジメント：言語とディスコース」
田中宏昌（明星大学）
「海外現地採用活動から見る国際コミュニケーションマネジメント：台湾と韓国を実例に」
萩谷潤（アスレプラス合同会社）
パネルディスカッション
17:15 –17:30　閉会の辞
米岡ジュリ（熊本学園大学）

大会実行委員長挨拶

齋藤智恵（国際医療福祉大学）

去る 12 月 6 日（土）、日本「アジア英語」学会第 39 回全国大会が東洋英和女学院大学横浜キャンパスで開催された。本学会の竹下裕子理事のお骨折りにより、教室を大会会場として提供していただいたことに加え、東洋英和女学院大学の教職員の皆様には多大なるご協力とご尽力をいただいた。勤務校での開催が叶わず不安な気持ちでいっぱいだったが、東洋英和女学院大学の皆様の献身的なサポートのお陰で開催までこぎつけることができたことに安堵し、当日の朝を迎えた。

池沙弥理事の司会の下、吉川寛会長の挨拶とともに本大会がスタートした。午前の基調講演では、東洋英和女学院大学の Patricia Sippel 教授が、歴史学者として、またオーストラリア人として、オーストラリアの歴史を概観しつつ、オーストラリア英語について論説してくださった。午後には、多様な角度からアジア英語、英語教育を捉えた 4 件の興味深い研究発表があった。シンポジウムでは国際コミュニケーションマネジメントについて教育、ビジネスなど、多様な立場からの発表があり、意見の交換が行われた。大会の詳細は仲潔理事、池沙弥理事、トレント信子会員のレビューに委ねる。活発な質疑応答がなされたが、十分な時間をとることができずに消化不良な場面があったかもしれない。しかしながら、いずれのセクションにおいても、限られた時間にも関わらず多くの情報が凝縮されており、参加者にとって学び多きとても充実した時間であったと確信している。米岡ジュリ理事による閉会の辞では、節目となる第 40 回の全国大会は中京大学で開催されることが報告され、本大会が終了した。

今回の大会では、日本「アジア英語」学会の会員だけでなく、外部の方々にも多大なるご協力をいただいた。基調講演をお引き受けくださった Sippel 先生はじめ、シンポジウムのパネリストとしてご参加いただいた田中宏昌先生（明星大学）、萩谷潤氏（アスレプラス合同会社）には多忙なスケジュールの合間を縫ってご尽力いただいたことをここで改めて感謝申し上げたい。

この度、初めて大会実行委員長の大役を務めさせていただいた。目の行き届かないことばかりで、運営をサポートしてくださった理事、会員の皆様、そしてご参加くださった皆様にはご迷惑をお掛けしたことを詫びるとともに、ご協力いただいたことに心から感謝申し上げたい。特に、本大会のために文字通り東奔西走してくださった、開催校である東洋英和女学院大学教授の竹下裕子理事には、この場をお借りして厚く御礼申し上げる。

第 39 回全国大会 基調講演レビュー

仲　潔（岐阜大学）

第 39 回全国大会は、東洋英和女学院大学（横浜キャンパス）において、12 月 3 日に開催された。晴天に恵まれた、暖かな一日であった。基調講演は、会場校の教授で本年度を以てご退職される、パトリシア・スイッペル先生による“An Acceptable Speech Variety? A Historical View of Australian English”であった。以下、氏の講演内容を振り返っておきたい。

オーストラリアは、2,400 万人（世界第 4 位）が英語を使用する英語大国である。2015 年には 50 万人近いインターナショナル・ステューデントを受け入れており、英語の留学先としてもメジャーである。その英語の特徴は、明らかにイングランドやアメリカ合衆国とは一線

を画している。このようにオーストラリアは、現在では「英語国」として確固たる地位にある。しかしながら、はじめから英語大国として安泰であったわけではない。氏はイギリスの入植以降の歴史を「言語」に焦点を当て、オーストラリアにとっての英語および英語以外の言語がどのように受け止められてきたのかを振り返った。これは単に言語の歴史を知るのではなく、グローバル時代における英語変種の未来や、変種間の“acceptability”について考えるための手立てとなる。

パトリシア・スイッペル 東洋英和女学院大学教授

1850 年以降、オーストラリアへの移民が増加する。その後、1901 年には、Commonwealth of Australia が6つの新しい独立州として設立される。次第に、ブリティッシュ英語とは明らかに違う特徴を形成していくわけだが、それが最初から好意的に受け止められてきたのかといえば、そうではない。当初は、修正されるべき英語として受け止められていた。1940 年代までは、RP 発音に近づくべきであると信じられていたそうである。ところが、第二次世界大戦の終了を機に、非英語圏からの移民が急増する。さらに、1966 年以降は“White Australian”が終焉を迎え、翌 1967 年には原住民を認める方策へと転換されていく。このような社会の動きは、人びとの言語への認識にも変化をもたらした。例えば、1960 年代以降、オーストラリアのアクセントを取り入れたラジオ番組や映画などが増え始めた。1981 年にはオーストラリア英語に関する辞書が編纂されることになった。「修正されるべき」と信じられていた英語であったが、その特徴が記述・一般化され“General Australian”に、さらにはそれに対する好意的な認識によって“Australian English”へと、その地位を高めていった。

現在のオーストラリアでは、11％が家庭では英語ではない現地語を使用しているとのことである。さらには、260 言語にも及ぶ多言語社会が形成されているそうだ。中でもイタリア語、ギリシャ語、広東語、アラビア語、マンダリン語、ベトナム語の話者は多い。また、ギリシャ人やレバノン人、イタリア人の増加の傾向があるそうである。オーストラリアは、アメリカ合衆国とは異なり、経済的・政治的に見て圧倒的な地位にあるわけではない。それにもかかわらず、「英語国」としての地位を獲得してきた。つまり、経済的・政治的観点から、言語の地位について語りきることはできないのだ。アイデンティティや多様性を維持することは、さまざまな英語の受容度、容認を推し進めて行く原動力となり得るのである。

以上、氏の講演内容を筆者なりに言及してきた。私の文才の無さ故に、基調講演から得られた充実感を会員諸氏にうまく伝えられるのか不安である。そうであ

れば謝罪するほかない。末尾になったが、講演後にはスイッペル先生に花束が贈呈された。この日の陽気な天気に負けない、あたたかな笑顔で講演は幕を閉じた。

研究発表概要

Paper presentations Review

Saya Ike, Sugiyama Jogakuen University

The afternoon started with four paper presentations, and all were presented in English. The first paper was by Professor George O'Neal from Niigata University. Professor O'Neal is currently working on his Ph.D. at Waseda University, and in his presentation entitled "Beyond Mutual Intelligibility in ELF Interactions" he shared his analysis of ELF conversations focusing on phonological intelligibility. Efficiently using recorded audio segments, Professor O'Neal argued that there were occasions where something more than intelligibility of segmental pronunciation was negotiated in ELF interactions. In his corpus data, participants seemed to be aware of the fact that the pronunciation of one participant was not wrong and unintelligible, and yet they repeated the phrase several times in an attempt to unify their pronunciation of the particular words/phrases. Although intelligibility continues to be a mainstream strand of ELF research, Professor O'Neal suggested that the broader interpretation and analysis of intelligibility may be necessary to fully understand ELF interaction.

The second presentation was by Dr. Tomoyuki Kawashima of Gunma University on "Factors Influencing Intelligibility of Non-native Speech for Non-native Ears: A Preliminary Literature Review". Questioning the tradition of using "native speaker" participants in intelligibility research and using them as the judge of pronunciation, he first summarised possible influential factors of intelligibility that had been discussed in literature, including strength of accents, speech rate, familiarity with and attitude towards a particular variety of English. He then discussed past intelligibility research that involved non-native speakers as the listeners, and he concluded that familiarity may affect comprehensibility or confidence, but may not affect the intelligibility.

Dr. Jean Mulder from University of Melbourne was the third presenter, reporting the findings of a study investigating Indonesian English with Andriyani Marentek of Sam Ratulangi University (who could not attend the conference this time). In this paper entitled "The Use of Articles and Plurals by Indonesian Speakers of English in ELF interactions", Dr. Mulder focused on the distinctive use of articles and plurals in a 15,000-word corpus, and with very detailed analysis, she convincingly presented that the appearance of the distinctive usage was not random but systematic. She then discussed the motivations for using the distinctive features of Indonesian English, and argued that the features may be shared in ELF

varieties, but the motivations for the use and emergence needed to be carefully examined in each case.

The last presentation was by Professor Yuji Nakamura from Keio University on "Fundamental Issues of Assessing EIL/ELF in a Classroom Context". He argued that the conventional practices of English assessment based on native-speaker norms need to be re-examined and redesigned with the spread of English in the world, and pointed out the gap between classroom contexts and standardised tests. After introducing Hu's (2012) five principles of English assessment, Professor Nakamura then showed how he had been incorporating the principles in his teaching practice using an EIL flipped class approach. The longitudinal investigation of an EIL classroom suggested that participants increased the awareness of varieties of English and developed positive attitudes towards EIL and ELF, and Professor Nakamura argued for a more socio-linguistically sensitive approach to assessing English ability.

シンポジウム概要

トレント 信子（東洋英和女学院大学）

シンポジウム「国際コニュニケーションマネジメント: 理論と実践 (Symposium "International Communication Management: Its Theory and Practice)」では 4 名の研究者の方々を中心に日本人に高いコニュニケーション能力が求められている現況においてグローバルな視野を持つ教育者及び学生を育てるために個人、企業、行政など様々なレベルで日本の教育をいかに前進させて行けるのかが議論された。

東洋英和女学院大学の竹下裕子氏は日本における英語教育を含む外国語教育と日本人の「国際コミュニケーション能力」を育てることはそれぞれ独立した課題であることを強調された。国際コミュニケーションには相手の言語的、非言語的な文化を理解し受け入れる力が要求される。特に日本のビジネスが国際化して来た現在、日本の企業の国際コミュニケーション力向上の必要性が高まっている。これまで企業は TOEIC スコアなどの個人の英語力に注目する傾向があったが今や企業は自分たちが国際コミュニケーターになる必要があることを強く意識するべきである。グローバル言語としての英語、国際語としての日本語、そして他の外国語も必要であるという認識を持ち、企業はそれぞれの分野に適した国際コミュニケーションマネジメント戦略を設定することが求められている。ここで大切なポイントは国際コミュニュケーターを育てることとは別に国際コミュニケーションをマネージする人材の育成が必要になっていることである。人材教育は企業内や外部の教育機関で行えるが理想的には日本の大学教育も国際コミュニケーション能力を育てる場所として活用されるべきであろう。竹下氏は英北米等のスタンダード英語教育に傾倒しがちな現在の日本の大学教育において、アジアでニホン英語を活用すること、異文化間のコミュニケーションの違いを理解するグローバルコミュニケーション能力を持つ人材を育成することの利点を強調された。

昭和女子大学の三宅ひろ子氏は学生のレポートから検証できる学生の国際コミュニケーションマネジメントに対する意識についての分析結果について論評された。研究に参加した学生は「グローバル状況における言語、文化、コミュニケーションの重要性についてあなたが関心を持つ分野あるいは問題を絡め考察

する」というトピックについてレポートを書き、提出された142件のレポートからの280,423の語彙がKH Coderを使用した分析の対象となった。分析の目的は「学生が国際コミュニケーションマネジメントについて潜在的にどのレベルの意識を持っているか」を検証することである。主な分析結果の内容は以下の通り。最も頻度が高かった語彙は「英語」「文化」「コミュニケーション」「日本」「言語」「日本人」(頻度が高い順)でエッセイトピックに含まれていない「英語」という言葉が最も使われていることは「英語」と「グローバル」の強い関係を学生が意識していることを示す。「英語」「グローバル」「企業」「文化」「必要」「日本」といった語彙は媒介中心性が高く他の言葉と言葉をつなげる役割を果たしている。この 6 語に「コミュニケーション」「国際」「言語」を加えた語彙グループは次数中心性が高く、より多くの他の言葉と仲間関係を持っていると見られ、「英語」は「国際＋言語」であるという学生の意識がここで垣間見られる。頻出性が高くかつ中心性が高い三つの語彙は「英語」「文化」「日本」の3語でキーワードと考えられる。「英語」は「英語+教育」「英語+変種」「英語+研修」のコンテクストで多用され日本の教育における英語教育の既に安定した位置を示すと思われる。「文化」は「理解」「コミュニケーション」「背景」と共に多用されており、「日本」は「企業」「国内」「文化」といった語彙と関係して使われている。これらの結果は学生がスムースな異文化コミュニケーションのためには文化的背景を知ることの意義を意識していることを示すと分析できる。「国際コミュニケーション」という表現はエッセイトピックでは使われていないにもかかわらず161 件と頻出しており、「能力」「企業」「必要」と近接して使用されていることは学生が国際コミュニケーションマネジメント能力は企業にとって必要なものであるという意識を持っていることを示している。一方、三宅氏は多文化環境における国際コミュニケーションマネジメント能力の必要性についての教育は成果をみせてはいるが未だに企業研修に頼っている部分が多く教育機関、学生にさらに意識を広げていく必要があると結論されている。

明星大学の田中宏昌氏は複数の言語をクラス内で使用することの成果についての研究結果を示された。田中氏が教鞭をとっておられる明星大学では日本語が母語ではない留学生の比率が高いため英語と日本語がクラスで使用されている結果、クラスでの学生の学びに積極的な成果がみられ、かつ卒業した学生が企業内で実務についてからも高い評価を受けることにも貢献している。田中氏は日本の伝統的なクラスのディスコース(discourse)においては社会的に適切な言語的、非言語的な行動がはっきりと教示されず、学生たちはクラスの内容に無関心であるようにみせることを要求されていると思っている傾向があることを指摘された。この日本人の「沈黙」は言語だけではなく教師中心の一方的なクラス運営などの社会的な要因によって形成されてきた。この日本のクラスのディスコースは使用言語を変えることによってより学生参加型のディスコースに進化する可能性がある。田中氏はEMI (English Medium Instruction)クラスに参加した学生は学期の初めは沈黙しているが次第に意見を言うようになってくると報告された。言語的、文化的に多様な学生によって構成されているEMIのビジネスのクラスで日本の学生は「自主的選択」(self-selection), 「意見を出して参加する」(function), 「主導する」(take initiative)のプロセスを経てディスコース能力の進歩をみせた。英文法その他にとらわれたりする余裕なくとにかく何かを言わなければならないのでそこから参加が始まる。EMIクラスの経験は複数の言語が多様な文化的背景の話し手によって使われる将来の実際の仕事場でも役に立つ。EMI 学生は現実に国際企業で高い評価を受けている。田中氏のリサーチはクラスで使用言語を変えることが学習者の発想を変え国際社会で活躍できるきっかけを与

えるうることを提示した。グローバル人材に要求されるのはホスト国や自国についての知識、言語とコミュニケーション能力、と自己マネジメント能力である。学生は自分たちのマネージャーになることが必要となってくるだろう。一方、伝統的な日本企業は企業文化を、日本の大学は教育文化を再考しこのような学生の能力をいかす環境を構築していくことの必要性も田中氏によって指摘された。

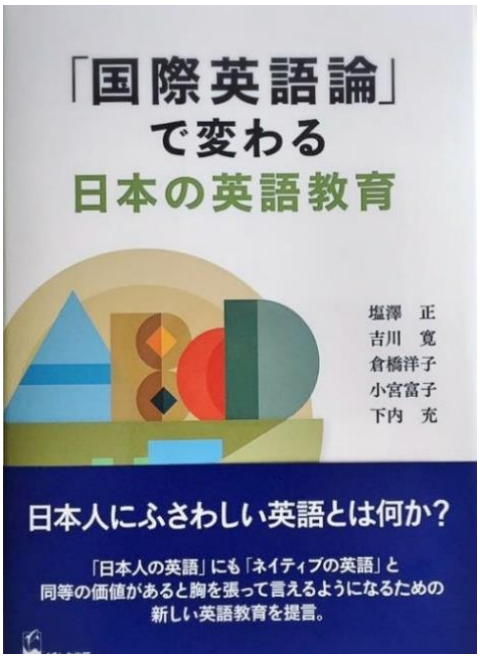
人材開発企業、アスレプラス合同会社の創業者及び CEO の萩谷潤氏はご自身の起業に至る迄、そして起業されて以降のご経験から日本企業における国際コミュニケーション能力の必要性について教示された。外国語能力は単にコミュニケーション能力の一端であり国際的な企業活動には総括的な伝達、共感、背景理解能力が最も要求される。まず萩谷氏が起業された背景は日本の急速な人口減少の結果としての若者の労働力不足が深刻な現状であった。問題に対しての一つの解決策は海外からの労働者の移民、特に若い働き手を日本に迎えることであり、政府も遅まきながらその方針を打ち出している。これから日本で仕事をする外国人の人口は上昇する見込みであり彼らと日本人のコミュニケーション能力が問われることになる。萩谷氏のアスレプラス社はグローバル人材を求めている日本企業に主に韓国、台湾からの人材を紹介しておりその数は毎年二千人に昇る。同時に日本で外国人が成功裡に仕事をするための教育プログラムもソウルの大学と共同開発して提供している。これらのサービスを成功させるためには国際コミュニケーション能力についての理解は不可欠である。萩谷氏はインタビューや紹介者の実例を挙げてこの点を検証した。萩谷氏はご自身の海外経験、起業経験から無意識の「ポジショニング」「差別化」を成功のキーポイントとして話された。自分の強いところを生かして行き、他の人々と少し異なることに焦点を当てる。例をあげれば外国語は英語ではなく韓国語を選択した。英語は皆勉強しているので英語より希少価値があると考えた結果である。そして韓国の大学院で学んでいた時には韓国語のネイティブスピーカーになろうと努力したが結局ノンネイティブであることを強調したほうがビジネスのためになったという結果になり、留学生であるという立場をフルに使って起業活動ができたというご本人の国際コミュニケーション力が立証されている貴重なご経験談であった。終わりに萩谷氏は日本人の若者層の国際競争力の低下についての懸念、そして日本人労働者の国際力の向上にも貢献したい意思を示された。

事務局より

第 40 回全国大会のお知らせ
日　程:2017 年 6 月 24 日(土)
場　所:中京大学　名古屋キャンパス
JAFAE ウェブサイトをご覧下さい
http://www.jafae.org
研究発表応募:JAFAE ウェブサイトのエントリー画面よりご応募ください。

書籍紹介

本学会会員が関係する出版書籍
『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』
塩澤正、吉川寛、倉橋洋子、小宮富子、
下内充（著）
出版社:くろしお出版
ISBN:9784874247044
発行年月:2016 年 6 月 21 日



ニューズレター担当より

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、本学会会員出版の書籍紹介(本学会の主旨に関連するもの)、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語800～1,200字程度、あるいは英語ではA4用紙2/3～1ページ程度の分量でおまとめいただければ幸いです。編集の都合上、投稿を希望される方はあらかじめ、編集担当の田中(tfujimi@seiryo-u.ac.jp)までご連絡下さるようお願い申し上げます。

2017年3月31日発行
編集・発行 日本「アジア英語」学会
代 表 者 吉川 寛
編 集 長 田中富士美
事 務 局 〒466-0825
名古屋市昭和区八事本町101-2
中京大学国際英語学部 榎木薗鉄也研究室内
E-mail: jafaeoffice@gmail.com
学会ホームページ:http://www.jafae.org
年会費振込先:郵便振替 00280-8-3239
<< JAFAE Secretariat >>
Professor Tetsuya Enokizono
Department of World Englishes, Chukyo University
101-2 Yagoto Honmachi, Showa-ku,
Nagoya, 466-0825 JAPAN
E-mail: jafaeoffice@gmail.com
JAFAE's homepage:
http://www.jafae.org
JAFAE's postal transfer account number
00280-8-3239